

『復活についての問答』

聖書 マタイによる福音書 22章 23～33節 讃美歌 497 327

説教 森田幸男牧師

8月の間は正午礼拝がお休みでしたので、少し間がありました。前回私たちが読んだのはこの直前、22章 15節以下でありました。今日のところは、「その同じ日、復活はないと言っているサドカイ派の人々が、イエスに近寄って来て尋ねた」とこのようにありますが、その「同じ日」というのは、今申しました22章の15節以下で、ファリサイ派の人々が、「皇帝への税金を納めることは聖書の教えに適っているかどうか」という質問を出したのであります。これはローマの支配下にあるイスラエルにとっては切実な問題であるし、これに答えるのも非常に難しい問題なんですね。机上の空論では済まないわけです。そしてどちらかという、ファリサイ派は反ローマの傾向があります。ですから皇帝に税金を納めるということについては否定的であります。そういういろんな事がある中で、この難問をイエス様に突きつけたわけです。当時の状況を考えるとどちらに答えても逃げ場がないような、非常に難しい問題を出しました。しかしこれに対してイエス様は、「税金に納める銀貨を見せなさい」と言われて、彼らがデナリオン銀貨を持って来ると、そこにはローマ皇帝の名前と肖像が刻まれているわけです。それでイエス様が、「これはだれの肖像と銘か」と聞かれると、彼らは答えざるを得ません。「皇帝のものです」と言うと、「それでは、これは皇帝のものだから、皇帝のものは皇帝に返しなさい。そして神のものは神に返しなさい」と言われました。

「神のものは神に返す」というのは、創世記を見ると、「神様はご自身に似せて人を創造された」と書いてあります(1:27)。ですから私たち人間には神様の似姿が刻まれているのです。だからその税金問題ということについては、これは皇帝に納めなさいということです。「しかし、あなたがた自身のその全存在は神に献げなければならない」と答えられて、質問した彼らが逆に行き詰ってしまうということがあったわけです。

これを聞いたサドカイ派の人々が、今度はイエスに近寄って来て尋ねたわけです。このサドカイ派というのは祭司階級で、貴族階級です。エルサレムの神殿を中心にした、宗教体制を中心にした祭司の族、貴族階級がこのサドカイ派でありました。そう

いうわけで、このサドカイ派というのは、どちらかと言えば「親ローマ」です。つまり、現体制を保つ、秩序維持派です。もしそうでないと、ローマの圧倒的な力によってエルサレムの神殿も破壊されるというようなことにでもなりますと、神殿礼拝の中心にいた彼らの存在もなきものになってしまいますから、何としてでも現体制を保持しなければならない。そういう点では彼らは親ローマ的でありました。そして一方、教理的にはファリサイ派とサドカイ派は対照的でした。どちらもイスラエルの中の教派ですから聖書なしには済まないわけですが、ファリサイ派はいわゆる旧約聖書全体と、それプラス、口伝律法、(聖書に明記されていないけれども聖書から展開して口伝えで教えられる様々な教え)を彼らの信仰生活の根拠にしていました。それに対してサドカイ派というのは、いわゆるモーセ五書、旧約聖書の最初の創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記のこの五つだけを自分たちの信仰生活の根拠にしていたわけです。

ですから何を根拠にするかによって、当然教え、また信仰の生き方というものが違ってくることがあります。23節、「その同じ日、復活はないと言っているサドカイ派の人々が」とあります。これはサドカイ派の一つの大事な立場を表わしています。「復活はない」というのがサドカイ派の立場です。旧約聖書最初の五つの書を見る限り、人が死後復活するということはないのだとサドカイ派の人たちは読むわけです。その他にも「天使」の存在というものもない。或いは「霊」というものもない。「因果応報」というものもない。因果応報というのは将来とか死後の生というものがなければ成り立たないわけですから、そういうものもない。また、「摂理」ということについても否定的だと言われるわけで、これがサドカイ派の立場、傾向であります。

そしてファリサイ派とサドカイ派というのは、イスラエルの民を指導するという立場で、主導権争いをしているわけであります。ですからファリサイ派がイエス様にやり込められたということを聞いて、今度は自分たちの出番だということでサドカイ派の人々がイエス様のところに近寄って来て尋ねたのです。「先生、モーセは言っています。『ある人が子がなくて死んだ場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけねばならない』と。さて、わたしたちのところに、七人の兄弟がいました。長男は妻を迎えましたが死に、跡継ぎがなかったので、その妻を弟に残しました。次男も、三男も、ついに七人とも同じようになりました。最後にその女も死にました。すると復活の時、その女は七人のうちのだれの妻になるのでしょうか。皆その女を妻にしたのです。」こういう問題を出したのであります。問題は何でもよかったです。イエス・

キリストをやり込めればいいのです。やり込めて、亡き者にして、現体制を維持する。それがサドカイ派の根本動機で、こういう質問をしたわけです。ここに例話として持ち出されているのは極端な話ですが、これに似たようなことはあったでありましょう。これは彼らが根拠にしている旧約聖書のモーセ五書の申命記 26 章 5 節 6 節に「家名の存続」ということでそのことが書かれています。結局、兄が子供をなさないで死んだら、弟が兄嫁を妻にし、生まれた子供には長男の名前をつけるという形で、その名前を保持するための一つの結婚制度でした。これは、今日、夫婦別姓制度ということもそこまで来ていますが、これまでの観念ですと、やはり苗字を残すというようなことで養子を迎えるとかして、何としてでもその家の姓を残していこうとするような傾向は我々にもあるわけですね。そういうことが聖書に書かれていますが、彼らは「復活はない」と言っている立場です。要するに、彼らはこの問題を出してイエス様を困らせたいいわけで、そういう質問をいたしました。これは他所の国の話のようですが、これは案外私たちの場合でも結婚制度はともかくとして、この世では離婚ということもあれば再婚ということもあるわけですね。そういう場合、それこそ復活した時そういう問題はどうなるのだろうかというのは案外切実な問題としてありますね。いずれにしても彼らの目的は、復活はないという立場でキリストを困らせればいいというのが彼らの狙いであります。そういう意味では彼らは現状維持派、或いは現世的であります。

これに対してイエス様は 29 節で答えておられます。「あなたたちは聖書も神の力も知らないから、思い違いをしている」と。ここでイエス様は、「あなたたちは聖書知らない。神の力も知らないから、そんな読み違いをして、そういう問いを出すのだ」と言われています。そして、「復活の時には、めとることも嫁ぐこともなく、天使のようになるのだ」と。「天使」というのは、先ほども言いましたように彼らは天使という存在も否定するわけです。けれどもイエス様は、「復活の時には、この地上の世界のようにめとるとか嫁ぐとかということは最早ない。皆天使のようになるのだ」と言われます。ここに一つの神の力の現れがあると言ったらいいいと思います。「天使」とは「神の使い」で、彼らの関心事は専ら神様の御心が成ることです。自己中心ではないのです。この現状の宗教体制を保持して利権を守るというようなことは、アメリカの大統領選挙でも、日本の二大政党云々というふうなことでも、いろんなところで主導権をどう握るかということに関心があるわけです。要するに、自分の立場をどう主張して保持して利益を得るか、そういう関心事から全く離れている人はいないと思うんです

ね。けれども天使という存在は自己中心ではないのです。神様の御心が成る、専らそれに仕えるのが天使です。

この地上の歩みの中では、私たちは天使のように中々いかない。それに日々近づくことを願いつつ、「御国が来ますように、御心の天に成る如く地にも成りますように」と「主の祈り」で祈っているのです。そのように祈り求める時には、その他のもろもろの問題というのはちゃんと位置づくのですね。「七人の兄弟の妻は復活の時、だれの妻になりますか」というふうな問いは、普通考えると難しくなってしまうのですが、そういうことも自分自身を中心にするというものの考え方ではなくて、神さまの力と神様の愛とその恵みが天にも地にも成るようという関心が中心ならば、もろもろの問題というのは全部解けるわけです。サドカイ派の関心はファリサイ派を退けて自分たちが主導権を握るために今、キリストをやっつけたいわけです。そういう点では彼らは神様も神様の力も知らず、その信仰は観念的で自己中心です。彼らは祭司ですから神様に専ら仕えるということですが、その本音は現状維持です。宗教体制を保持するためにキリストを亡き者にして、自分たちの立場とか利権を守る。それはどういう装いをして、本当の信仰とは言えないところに彼らは落ちているわけです。

そういう点で、私たちは今も後も常に、とこしえに限りない神の愛の御手の中に生かされているのですから、神様の御心が成ればよい。「天使のようになるのだ」というのは、天使の関心は神の御心に仕えるということだけであります。神を神として信じ、信頼し、恐れ敬う中ですべての事が正しく順序づけられていくわけです。これが一つの問題です。

もう一つは 31 節、「死者の復活については、神があなたたちに言われた言葉を読んだことがないのか。」サドカイ派は死者の復活ということはないという立場です。それは彼らなりに聖書を根拠にして「復活はない」というのです。聖書を根拠にして、聖書にこう書いてあると言えば、それが正しいかと言えば、そんな単純なものではないのですね。ファリサイ派も聖書を根拠にします。それでもこんなに立場が逆になっているのです。ですから聖書を根拠にすればそれで解決済みかと言えば、そんなことではないのです。聖書をどう読むかということがその先にあるのです。彼らも聖書を読んで、聖書を根拠にしてこういうことを言うわけです。彼らも先ほどの七人の兄弟云々の時には、「モーセはこう教えています」と言っています。旧約聖書の最初の五つの書は、モーセが書いたというのが当時の人たちの考え方でした。そこでイエス様は、「死者の復活については、神があなたたちに言われた言葉を読んだことがないのか」と言

われます。32 節、「『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。これはモーセの召命の記事、出エジプト記 3 章 6 節、15 節に、神様がモーセに現れた時、神様が自己紹介の言葉としておっしゃった言葉です。これは書いてあるので否定しようがありません。神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。」「神は死んだ者の神ではない」というのは、サドカイ派の人々の立場です。彼らは死人の復活などないと言うのです。イエス様は、「神は今ここで生きている者の神なのだというのがあなたがたの立場です。そうすると神様が、『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とおっしゃっているのだから、アブラハムは生きている。イサクもヤコブも生きているということではないですか」とこのように言われて、彼らの悪質な意図も挫かれました。そして「本当に大事なものは『今だ』とあなたがたが言う。今本当に神様を信じて、畏れて、生きること、そしてその御心が成ると言うことが大事なのだ。そしてこのようにおっしゃる神様は、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神であるし、そして勿論モーセの神でもあるし、私たちの神でもある。そうすると本当に神を信じるということにおいて、死んだ人間も神様との関わりにおいて今生きているのだし、そして今ここに生きている者も神様を信じる時にはその神様の前に生きているのだ」とこのようにおっしゃって、観念的な、本当に神様を信じ、神様を恐れ、その御心が成ると言うところから全く離れてしまっている彼らの観念的な、死んだ信仰を、こういう風に逆に問われたのです。

永遠に生きておられる神様を信じる時、その時点で、信じる者は永遠化するのです。神様は死んでからとかではなくて、本当に神様を信じる時に、私たちは地上の限りある命を生きながら、神様との関わりにおいて永遠の中に引き入れられる。永遠化すると言ったらいいのでしょうか。ですから神様との交わりというのは、死を越えて永続化するわけです。だからイエス様はヨハネによる福音書で、「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか」(11:25~27)とマルタに問われました。正にこのようにして私たちは、今も、そして死の後も、神様との関わりの中に生きる。そしてそこで本当に私たちが願うところは、「神様の御心が成りますように」ということなのです。その時にすべてが収まるところに収まっていくわけです。

そういうことで、私たちは礼拝の度ごとに「主の祈り」を祈ります。私たちは時々、関心の重点があちこちと違うところにかかるということはあります。けれどもイエス様が教えられたこの「主の祈り」を、「願わくは御名を崇めさせ給え。御国を来ら

せ給え。御意の天に成る如く、地にも成させ給え。我らの日用の糧を今日も与え給え。我らに罪を犯す者を、我らが赦す如く、我らの罪をも赦し給え。我らを試みにあわせず、悪より救い出し給え。国と権(ちから)と栄とはかぎりなく汝のものなればなり。アーメン」と私たちは先ほど祈ったのですが、この祈りを本当に祈り、またそれを祈りつつ生きていく時に、すべてのことが収まっていくのです。

そういうことで、今日のところは同じ聖書を読みながらも、その関心が神に向いているか自分に向いているかで、全く違う生き方になってしまうことが示されます。そういう点では、聖書を読むということは容易ではない。容易ではないけれども、本当に神様の御意を求め、求め、そしてその御意が成りますようにと祈る。そういうところから離れてしまいますと、いくら聖書を読んで“ああだ、こうだ”と言っても、神様の御心から遠いことになってしまう。そういう一つの姿をサドカイ派の姿に見ることができると思います。そういう意味で、わたしたちは主の祈りを全体として心から祈ることがとても大切だという事を思い知らされるのであります。

お祈りいたします。

聖なる、憐れみに富みたもう生ける神様。

どうか、私たちが常にあなたを仰ぎ、あなたを信じ、あなたを畏れ、あなたの恵み深い御心が本当にこの地にも成りますように、そのことをひたすら求めて歩むことができますように、お導きください。

この祈り、主イエス・キリストの御名を通し御前におささげいたします。アーメン